

独思録：「5月4日は何の日？」(5/10)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

5月4日は月曜日。それ故、最初は憲法記念日の振り替え休日ではないかと思った次第です。

しかし、5月6日が振り替え休日だということが分り、夏目漱石の「草枕」の「山路（やまみち）を登りながら、こう考えた。」
ではありませんが、鎌倉のハイキングコースを歩きながら考え、5月4日は「みどりの日」だと思い出しました。

「草枕」では、
「智（ち）に働けば角（かど）が立つ。情に棹（さお）させば流される。意地を通（とお）せば窮屈（きゆうくつ）だ。とかくに人の世は住みにくい。
住みにくさが高（こう）じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟（さと）った時、詩が生れて、画（え）が出来る。」
と続きます。

さすが、文豪漱石先生。住み難い世の中でも、頭に浮かぶのは詩であり画であるようです。

このゴールデン・ウィーク、「ETC搭載車休日高速道路1000円均一」に車で出れば、大渋滞。「家電製品のエコポイントや自動車のエコ減税」に踊らされれば、買い過ぎる。この両者の関係、高速道路の大渋滞で、CO2を多量に排出し、その尻拭いを国民のエコ製品購入で補う大矛盾。正に噂されている、与党の選挙目当ての点数稼ぎという明々白々の政策。裏では税金で穴埋めをし、消費税率を上げて付けを国民に廻す所存。これも明々白々。とかくに人の世は住みにくいではあ～～りませんか。

文豪漱石先生は更に続けます。

「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。」
とくると、今の日本、「人でなしの国」と予見していたような気がします。

話を元に戻しますが、「みどりの日」に決まった平成元年、文部次官は、
「この『みどりの日』は、我が国が緑豊かな自然を持つた国であることにかんがみ、この自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心を育むことを願う趣旨をもつて定められたものであります。

ついでに、学校、家庭、社会を通じて『みどりの日』の意義を理解させるとともに関心を深めることが肝要と考えます。そのため、四月二九日を中心として児童生徒、一般社会人に対し、植樹等の緑化活動や植物園の無料公開などの自然に親しむとともに自然を大切にすることを育む行事を実施するなど、学校や地域の実情に応じた適切な方法により、その

趣旨の普及に努めるようご配慮下さい。

また、関係機関、団体等の行う諸行事についても、これと緊密に連絡をとり、十分に『みどりの日』制定の趣旨をいかすようご配慮ください。」

というお節介な通達を出しています。しかし、「みどりの日」が移動した今、その由来・主旨をはもう忘れられていることでしょう。正に「みどりの日、淋し〜〜い」です。

結局は、文豪夏目漱石の

「しばらくは路が平（たいら）で、右は雑木山（ぞうきやま）左は菜の花の見つづけである。足の下に時々蒲公英（たんぽぽ）を踏みつける。鋸（のこぎり）のような葉が遠慮なく四方へのはして真中に黄色な珠（たま）を擁護している。菜の花に気をとられて、踏みつけたあとで、気の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座ちんざ」している。呑気（のんき）なものだ。また考えをつづける。

詩人に憂（うれい）はつきものかも知れないが、あの雲雀（ひばり）を聞く心持になれば微塵（みじん）の苦（く）もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸が躍（おどる）るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も 桜はいつか見えなくなった。こう山の中へ来て自然の景物（けいぶつ）に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥（くたび）れて、旨（うま）いものが食べられぬくらいの事だろう。」

と気楽に、自然を満喫し、旨いものが食べられる程度に、腹を空かせるべきですね。

山形新聞：「高速道、Uターンラッシュ始まる 40キロ超渋滞も」(5/4)

ゴールデンウィークを古里や行楽地で過ごした人たちのUターンラッシュが4日、始まった。1000円で乗り放題の「休日割引制度」が導入された高速道路は、都心に向かう路線が各地で渋滞した。

日本道路交通情報センターによると、高速道の上りは昼すぎから渋滞が出始め、栃木県矢板市の東北自動車道矢板インターチェンジ付近で43キロ、九州自動車道広川インター（福岡県広川町）付近で36キロ。

東京と神奈川の境にある中央自動車道小仏トンネル付近でも29キロ、東名阪自動車道鈴鹿インター（三重県鈴鹿市）付近で26キロとなったほか、関越、名神などでも2、30キロを超えた。その後、一部で緩和されたものの、渋滞は深夜まで続いた。

JRによると、東海道、東北、上越、長野などの各新幹線の上りは目立った混雑はない。

日航や全日空の地方から羽田に向かう空の便は、それほど込んでいないという。

Uターンのピークは高速道路が4 - 5日、鉄道が5 - 6日、航空機は6日の見込み。

朝日：「家電エコポイント、15日から適用 何に使えるかは未定」(4/22)

省エネ家電の購入を促す「エコポイント制」の適用対象が「5月15日以降に買った商

品」になった。

政府が21日、方針を決めた。制度は補正予算案に盛り込まれるが、国会での成立を待つと、買い控えを招くと判断した。ただ、ポイントが何に使えるかはまだ決まっていない。

産経：「エコカー減税 ハイブリッドは10万円超」(3/20)

平成21年度からスタート予定の「エコカー減税」に対し、自動車業界の期待が高まっている。

ハイブリッド車(HV)や電気自動車などの環境に優しい「次世代車」の自動車取得税と自動車重量税を減免するというもので、現在販売されているHVなら10万円強の値引きになる見込みだ。



<夏目漱石(1867-1916)>

小説家、評論家、英文学者。俳人(俳号は愚陀仏)。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。



大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学)英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。

春秋：「みどりの日」(5/4)

1年に15日ある国民の祝日のうち、最も地味なのが「みどりの日」ではないか。1989年に昭和が終わり、天皇誕生日だった4月29日はみどりの日に。「みどりの日昭和一桁（ひとけた）老いにけり」（稲畑広太郎）。当時の感慨が伝わる。

2年前から、その日は「昭和の日」となり、みどりの日はきょうに移動した。知名度の高い「憲法記念日」と「こどもの日」に挟まれ、もともと休日だったから、何で休みなのか、どうも忘れやすい。外国をみると、似て非なる、みどりの日がある。3月17日の「聖パトリックデー」。こちらは盛大に祝われる。

アイルランドにキリスト教を広めた聖パトリックの祝日だ。アイルランド本国だけでなく、アイルランド系の多い米国東海岸の諸都市で緑一色のパレードがある。聖パトリックは、父、子、聖霊の三位一体の教えを説くのに三つ葉のクローバー（シャムロック）を使ったとされ、それでみどりの日になっただけでいい。

ほぼ50日の差はあるが、彼我を問わず、みどりの日は自然の恵みに感謝する日なのだろう。風薫る季節だ。風を浴び、ざわめく緑がまぶしい。カレンダーをみると、休みはきょうを含め、まだ3日ある。遠出しなくていい。近くを散歩するだけで体感できる。「みどりの日風もみどりでありにけり」

< 聖パトリックの祝日 >

セントパトリックスデイ（3月17日）は、アイルランドにキリスト教を広めた聖人聖パトリックの命日。

カトリックにおける祭日であり、アイルランド共和国の祝祭日。

シャムロックを服につけたり、ミサに行ったりする。アイルランドでは何世紀も前からこの日を祝う伝統が受け継がれてきたが、正式に1903年より祝日となり、イギリスから独立後徐々に祝祭日として成長した。



聖パトリックの祝日の様子(アイルランド、ダブリン、2004年)

1996年には政府が主体となってダブリンで5日間の盛大なフェスティバルとなりパレードやその他の行事が行われるようになった。

< 稲畑広太郎（1957-） >

俳人。虚子の曾孫。兵庫県芦屋市生まれ。甲南大学経済学部卒業。俳誌「ホトトギス」の副主宰。

1982年合資会社ホトトギス社入社、本格的に俳句を志す。1988年ホトトギス同人及び「ホトトギス」編集長。2000年財団法人虚子記念文学館理事。2001年社団法人日本伝統俳句協会 常務理事。

著書に『曾祖父(ひいじいさん)虚子の一句』『ホトトギス雑詠句評会抄(共著)』『広太郎句集(花神俊英叢書)』『伝統俳句の一〇〇人』『句集 半分(日本伝統俳句作家叢書)』など。

天声人語：「緑の切符」(5/4)

東京の高尾山に登った。標高599メートルながら、都心から1時間圏にこれほどの自然はなく、仏ミシュラン社の旅行ガイドは富士山や京都と同じ三つ星をつけた。山腹へのケーブルカーが車内放送で星に触れていた。

頭上を覆うイロハモミジやイヌブナの若葉に、柔らかな陽光が透ける。なま乾きの絵のように、山全体が緑にぬれ、木もれ日までが色づいて見えた。俳人、星野椿(つばき)さんが詠んだ 新緑が新緑を染め人を染め の絶景である。

ストレス社会では、都会に 近い里山の価値はひとしおだ。ミシュランの評価も、たとえばパリから約1時間のフォンテヌブローの森を愛(め)でる感覚らしい。緑という色は誕生や永遠のイメージと結びつき、心身を癒やす効果があるそうだ。

小社刊『森と人間』(田嶋謙三、神田リエ著)の記述が興味深い。作家の宮沢賢治は、森や樹木を描くの に、緑より青や黒を好んで使ったという。その賢治も「銀河鉄道の夜」では、主人公ジョバンニの切符を緑、友人カムパネルラのそれをネズミ色とし、生死の別を暗示した。

木々の息吹が体に悪いはずがない。この時期、森にみなぎる「生」の色や香りを浴びれば、日ごろの不養生をいくらか埋め合わせた気にもなる。自然に寄り添う時間が命を温め、抵抗力を養ってくれる。

せきやくしゃみを気にしての大型連休も、みどりの日まできた。高尾山頂を含め、人込みを避けるのは難しいが、感染をくよくよと案じるばかりでは体に障ろう。せいぜい大樹たちの陰に寄り、「緑の切符」を買いだめしておきたい。

<フォンテヌブローの森>

イル＝ド＝フランス地域圏で最も広い面積を持ち、近郊のコミューンの中で唯一パリより広いコミューンであるフォンテヌブローにある、かつての王族の狩猟地で現在も自然が保全されている広大な森である。

フォンテヌブローは、近隣のアヴォンとその他の小さなコミューン3つとともに、人口約36,000人の都市圏を形成し、パリのリヨン駅から列車で、約40分で結ばれている。

フォンテヌブローには、歴代フランス王の愛したフォンテヌブロー城などがあり、パリジャンの週末の余暇地である。



J.M.W.ターナー「フォンテヌブローの森の奥の奥」

<田嶋謙三(1932-)>

技術士。林業コンサルタント。埼玉県生まれ。北海道大学農学部卒業。

農林水産省(林野庁)等に勤務。海外の森林資源の開発および情報収集の業務に従事。

著書に『北の森の哀歌』『放浪記ブラジル 可能性を秘めた新天地』『森と人間 生態系の

森、民話の森』などがある。

<神田リエ (1951-) >

山形県生まれ。県立鶴岡北高等学校卒業。山形大学農学部生物環境学科助教。

著書に『森と人間 生態系の森、民話の森』などがある。

読売：「幸せどんだけ？ 33枚葉のクローバー…岩手で見つかる」(5/5)

「クローバー博士」として知られる岩手県花巻市の農業、小原繁男さん（84）が3日、自宅の畑で33枚葉のクローバーを見つけた。



花びらのように折り重なった0・2～1センチの小さな葉。孫らと畑に腹ばいになって数字を書いた2ミリ角のシールをピンセットではり、枚数を確認したという。

60年ほど前に4～9枚の多葉株を見つけて以来、自然交配に取り組む小原さん。ギネス認定記録も、自身が2002年に発見した18枚で、更新申請の準備を始めた。「30枚は長年の夢だった」と感慨深げだ。

<小原繁男（1925-）>

クローバー研究者。農学博士。岩手県花巻市矢沢在住。

自然交配で、葉の増える過程を遺伝、温度、栄養面から研究し北海道大学から農学博士号を授与。



2002年に18枚葉のもので、ギネスブックにも登録され、その後、2008年には21枚葉や27枚葉のものが発見、更に今回（2009年）33枚のクローバーを発見し、ギネス認定に向け更新申請の準備を行っている。

余禄：「みどり」(5/4)

古事記や万葉集の時代は白と黒以外の色を示す言葉は「赤」と「青」しかなかったという。今も青葉というくらいだから緑色が「青」といわれていたのは分かる。では黄色はどうか。実は方言で最近まで黄色も「あお」と呼んでいた地方は多いのだ。

佐竹昭広さんの「古語雑談」(平凡社)の受けうりだが、一方でミカンを「赤い」という言い方も残っている。どちらかといえば古代ではおおむね黄色は「赤」に分類されたようで、黄が独自の色として意識されるのは平安時代以後らしい。

「みどり」は万葉集にもある言葉だが、草木の新芽を指していた。それがやがて色名になり、きょうはまさに若葉の輝く「みどりの日」だ。だが近年、その新緑を押しよけるように黄色い竹林が野山に広がってきたのはどうしたことだろう。

「竹の秋」とは竹の葉が黄ばんで新しい葉に生え変わる春の季語である。かつてなら里山の新緑に彩りを添えた竹林の黄だ。だが近年、荒れるままに放置された竹林は山林や畑まで侵食し、各地で里山の荒廃をもたらしてきた。放置の原因は輸入タケノコの急増や農家の高齢化だ。

わずか数カ月で20メートルも成長する竹である。森林に侵入した竹は、日光を遮って樹木や下草を枯らし、高密度な竹林を形成するという。竹林では鳥や昆虫が減り、土壌の保水力は低下し、二酸化炭素吸収も少ないから、環境への影響は深刻だ。

すでに各地でボランティアによる竹の伐採や手入れが行われ、竹の資源としての活用も試みられている。なお決め手は見つからないが、手をこまねいてはられない「みどりの日」の里山の黄信号、いや万葉人にいわせれば赤信号だ。

<竹の秋>

春の季語。

竹類の葉は1年で生え変わるが、5月から6月に黄葉して落葉するため、その時期を「竹の秋」と言う。

筍が大きくなった後なので、まるで子供を育てた親の竹が、疲れて枯れていくようにも見えるが、新芽に日光をあてるために古い葉を落としているのだと考えられる。

黄葉している時にはすでにその葉の付け根からは新しい葉が針状に伸びていて、古い葉が落ちると同時に新しい葉が開き、同化作用を始める。したがって葉のない時期はない。



< 佐竹昭広 (1927-2008) >

国文学者。京都大学名誉教授。東京府出身。京都大学文学部卒。その後、5年間特別研究生として在籍した後、学習院大学につとめ、その後、京都大学文学部助教授、同教授。名誉教授。

京大退職後は成城大学教授。国文学研究資料館館長など歴任、『万葉集』のほか、中世の滑稽文学の研究で知られる。

著書に『下剋上の文学』『民話の思想』『酒吞童子異聞』『万葉集抜書』『古語雑談』『絵入本朝二十不孝(古典をよむ)』『萬葉集再読』『閑居と乱世 中世文学点描』など。